

保育者養成校における音楽的自立についての一考察

幼稚園実習を終えた学生へのアンケート調査から

A study on independence of music learning at childcare training school
Based on the survey of students who underwent educational practice at kindergarten

鈴木由美子 (千葉敬愛短期大学) Yumiko SUZUKI (Chiba Keiai Junior College)

林 麻由美 (千葉敬愛短期大学) Mayumi HAYASHI (Chiba Keiai Junior College)

(キーワード)

音楽教育、保育者養成、ピアノ、弾き歌い、自立

1. はじめに

養成校における音楽の授業は、ピアノの技術指導に時間が割かれ、楽譜の再現を目指したものになりがちである。しかし実際の現場では、その技術を基に幼児の表現活動の援助が行われていくことが求められる。それは、養成校で習得した技術だけではなく、子どもたちを前にして判断し、考え、実践するための自立した力が求められているという事でもある。学生の音楽的自立を目指すために、授業内でどのような工夫が必要か、実習に行き現場を経験してきた学生へのアンケートから考察した。

2. 実習における「弾き歌い」についてのアンケートと結果

(1) アンケートについて

目的 現場における音楽的技術のニーズを探る。

対象 平成29年5月29日から幼稚園実習を行った千葉敬愛短期大学2年生68名(鈴木、林担当学生)

方法 実習後1回目のレッスンにおいて、用紙を配布し記入式で回答してもらう。

質問1. 実習にあたり課題曲がありましたか?

「ある」と答えた場合、その曲数と具体的な曲名を記述する。

質問2. 実習が始まってから課題曲は出ましたか?

「ある」と答えた場合、その曲数と具体的な曲目を記述する。また、子供達の前で弾くまでの練習期間とその時に困難だと感じた事柄を記述するよう指示する。

質問3. 実習中、何日目からピアノを弾く、或いは弾き歌いをしましたか?

質問4. ピアノを弾いている時、子供達の観察はできましたか?

質問5. 自分の演奏、弾き歌いに関する現場の先生からどのようなアドバイスがありましたか?

(2) 結果と分析

実習生に向けた課題を出す園は90%であった。そのうちの60%が1~5程度の曲数で、「生活のうた」や「季節のうた」を課題曲として提示している園が多いことがわかった。また、40%の学生が実習中にも課題曲を課されたと回答しているが、これはあまり難曲ではなく、学生には練習時間も十分に与えられていることが解った。この自己練習段階で、学生自身が困難に感じたことについての回答では、発表者らの予想に反して、「歌うこと」に対して振り返った学生が多かったが、これは知らない曲に対する取り組み方について、自信が持てないということであろうと推察した。

質問3については、85%の学生が実習開始から2

週間以内には演奏をしたと回答し、質問4では70%の学生が演奏している時に子供達の方を見るとができた、と回答している。

質問5では、実際に学生自身が受けた現場教員からのアドバイスを問うた。その自由記述の中で、「曲の流れを止めずに演奏することが大切である」との助言を受けた学生が多くいた。また、「歌い出しの声かけや先歌いなど行うことが良い」との回答も目立った。反面、現場の先生は伴奏自体の難易度については問題視されていないと推察した。

3. 鈴木、林の授業での取り組みについて

保育者養成校の授業におけるピアノ実技は、一般的に好きな曲が弾けるようになりたいと考えピアノを習う事とは目的が違い、「幼児の表現を導くための技術」として、幼稚園教諭、保育士を目指す学生が学ぶ技術であることを忘れてはならない。それには、その時に行われる授業内容の目的を明確に提示し、より具体的な段階を設け、それぞれの学生に合わせて指導して行くことが大切であると考え。

そのことを踏まえ鈴木は、授業内で各学生に対応したより具体的な練習方法の提示とその確認を行い、学生が練習してきた曲だけを聞いて、宿題を出すのではなく、練習してきた曲を聞いた後、次の曲の構成や留意点、初めて出てくる演奏のポイントのアドバイスを行なった。また、レッスンの順番を同室内で待つ学生に対しては、レッスンを受けている学生が演奏する曲が自身の演奏する曲と同じでない場合でも教員からのアドバイスを楽譜に書き込むことを行なわせている。この方法は練習方法が理解でき、曲のポイントが分かることで、学生は練習がしやすくなったと平成29年度前期授業評価にあった。

また林は、保育現場で多く使われる躍動感ある曲への対応力を高めるための演習として、メトロノームを活用した練習方法を提示している。この演習により、ウラ拍に対する意識が高まり、躍動感ある曲の演奏法が身につくとともに、メトロノームのビートを聴きながら練習することで、自分の音を聴きな

がら他の音を聴く、即ちアンサンブルの力が身についていくと考える。また、学生はビートを聴きながら最後まで止まらずに弾けるようにする、という目標を持って練習に取り組める。さらに拍を意識させるために簡単なリズム楽器を使用して、ピアノとのアンサンブルを行うなど現場を想定しての取り組みも行なっている。

4. まとめ

アンケート調査から、幼児の音楽表現を導くために行われる「弾き歌い」やその他の音楽活動を子供の前で行うには、「自分で自信を持ってできる事を増やす」「できない、わからない事あったら、その解決方法を探す」「アクシデントがあった時に対応できる判断力をつける」このような事が重要である。そしてこれが保育者養成校での音楽的自立であると考え。

その自立を目指した授業を行うために、現在では各々に考えて取り組みを行っているが、その独自の取り組みを共有できるように研究を進めて行く事が重要である。目の前の曲をこなすためだけの授業ではなく、子供達のより良い音楽表現活動を援助できる保育者を育成するために、より具体的な指導内容の検討が必要である。また、今後は養成校の授業の取り組みだけではなく、保育現場とのコミュニケーションを図り、現場の幼稚園教諭、保育士へのフォローアップなども行っていくことも大切であると考え。